

ヨーロッパの自然保護の精神

安部 彰

最近、自然保護のことがよく話題にされる。半年間であったがインスブルクで生活したときに感じたことを書いてみる。外国人の自然保護の気持ちができると思うから。

インスブルク

インスブルクはオーストリアの西にあり、ウイン、ザルツブルクにつぐ都市であるが人口はわずか一万人である。東アルプスの中央谷間にあり、海拔六〇〇メートル、この地域をチロルと呼ぶ。ハプスブルグ家の女帝マリアテレッシアが築きイン川に沿ってある街。そう、TVのヨーグルトのコマーシャルに出てくるチロルの風景や、サウンド・オブ・ミュージックの場面が近郊の風景である。旧市街の高層の建物は最も古いもので五〇〇年前と云われる。友人が住んでいたアパートもロビーの床に一〇〇年前の年号が刻まれていた。私が住んでいた家はレンガ積み山の小屋風であったが、家具に刻まれていた年号は五〇年前であった。多くの古い建造物はそのまま人の生活の場になっている。外観の古さを壊さず内部はその時代にあった風に改造されている。もちろん、街には外観が近代的なビルもある。改修作業は人の作業が中心になるので工期はべらぼうに長い。靴などの日用品を修理しながら大切に使う精神につながっている。

インスブルクの生活は決して贅沢ではないが、極めて快適であった。市内はバス、トロリーバス、電車が縦横に、かつ頻繁に走って

便利である。国内外へ発着する駅と国際空港は至便な距離にある。我が国ではすぐにバスやタクシーを利用してしまいが、この国の人には三〇分くらいの徒歩は普通である。何が不便であったかというと、日本の新聞や食料がウイン、ミュンヘンまで行かないと手に入らなかったことである。休日には短波放送で日本のニュースを聞いた。当時のビックニュースは雅子さんの結婚と北海道の地震であり、皆に聞かれたことを思い出す。

勤労時間と余暇

街の朝は極めて早い。大学での勤務時間は会社などでの参考にならないが、朝八時から活発に始まっている。銀行は七時四五分に始まり、四時までであった。店の開店時間も早く、夕方六時くらいまでであった。昼は二時間くらい閉められる。食べ物は質素であるがその時間を大事にする。家が職場に近い人は食べに帰るようだ。昼時の特別な挨拶がある。顔を会わせれば「マーツアイ」と云う。お昼を楽しんでね、あるいは楽しんだかい、という意味である。

夏はサマータイムで日も長いからアフター五に山歩きをする人もいた。これほど、自然との触れ合いを大事にする。週末の別れの挨拶「よい週末を!」、私はこの言葉が好きであった。金曜日には仕事を早く片付け、週末の暮らしの準備をする。土・日曜日は思いきり自然と親しむ。休日の間、街の店は全部閉まっているから、これしかないのである。車や自転車を山の麓に乗り付けて散策する。冬や雪の山を散策するかスキーツアーを楽しむ。山道の雪は除雪車でよけられ、いつでも安全に楽しめる。

過ごし方は人いろいろである。家でのんびり過ごす人、たまに二泊の旅をする人。長期には年二回ほど一〜二週間の休暇を取っ

て外国へ出かけるようだった。自転車専用道路が次の街まで続いているので安全にサイクリングも楽しめる。回りは山々であるので、一般には山歩きを楽しむ。二千数百メートルに近い山々には広いなだらかな道が続いており、二千メートルくらいまでマウンテンバイクでも登れる。もつとも麓は海拔千メートルに近い。歩く人が少なくても山道の岩や木には、はつきりと目印が付けられているので初めてでも安全に散策できる。老いた夫婦、家族連れで足早に歩き、途中にある山小屋で休憩してから降りてくる。道で合えば、「グリーン・ゴット」(こんにちわ)の言葉を交わす。午前中のTV放送で近郊の山々に設置された自動カメラから土地の風景が映され、訪れる場所の天候を知らせてくれる。週末の終わった月曜日の挨拶ほどの過ごし方も「良い休日」であったのである。

訪れたミュンヘンで、休日の間地下鉄の全線にペットと家族と一緒に乗降できる割引切符を見つけたが、休日を十分楽しむことができるようになっていく。若者は自転車と共に列車に乗って旅をする。市内バスはスキーシーズンにはスキー靴を履いたまま乗ることも出来るし、低床式バスなので乳母車や車椅子も簡単に乗降できる。

生き物に対する心と自然保護の精神

虫・ペット・ヒト全ての生き物を本当に大切に。バスの中に迷いこんだ黄金虫がいた。乗客の一人がそとと擱んで停車ボタンを押して外に逃がしてやるのを見た。虫も乗客の一匹である。バスはワンマカーであるが、四回券を街のタバコ屋で購入しておき、乗車時に自分で消印を入れる。多くの人は長期の定期券もっていると思うが、見せることもない。この管理は全て自分です。車内でも一回券の販売をするが、客が長引いても悠長な対応である。我が国

のごとく規制本意の社会の仕組みと少し違ふと感じた。

ペットは人の暮らしに密着している。バスと一緒に乗れるし、飲食店など店の中にも連れていける。乳母車や車イスの乗降は誰となく自然に手伝ってあげる。また、街のバス停などには小さなゴミ籠が取りつけられている。市の職員がゴミをこまめに小さなトラックで回収に回っている。ゴミでいっぱいになることはない。道路清掃車もよく見掛け道路に目立つゴミは落ちていない。ドイツの国境に入った街ミッテンバルドを訪れた時のことである。この街はバイオリン生産で知られ、メルヘンチックな街である。ちよつと困ったことがあった。ゴミを捨てようとゴミ箱を探しながら歩いたが駅につくまでなかった。しかし道にゴミは落ちていない。外でゴミを捨てる習慣がないのである。

日用品のリサイクル精神は徹底している。店はむだな包装をしないし、日用品の全てに回収のマークがついており、回収される運命にある。街のいたる所に雑誌、新聞など紙類の回収ボックスがある。少し広い場所にはビン、缶の分別回収箱があるので、そこへ持って捨てる。スーパーマーケットの買い物では袋を一切くれないから、あらかじめ持っていかなければならない。あるいは別に購入しなればならない。店で買う靴や鞆の入った箱や、焼き増し写真の入った袋を、客に聞いてその場で回収してくれる。プレゼント品は自分で包装紙などを買って美しく飾るのである。

この地方での飲料水の使用量はケタ違いに多い。大きなスーパーマーケットではビールなど規格ビンに入った飲料水の空きビンも自動に回収して料金を精算するシステムがある。大学の研究室でも不要になったダンボール紙、上質紙、アルミホイール、缶、ヨーグルト

などの入っていたプラスチック容器などを分別して捨てる。もちろん注射針などバイオハザードは特別に回収する。

家庭の動力エネルギーは二〇〇Vの電気が中心である。キッチンのコックは電気レンジであり、洗面や風呂の湯は深夜電気湯水器である。電柱はなく地下に配線されている。しかし、冬の暖房はオイルによるスチーム暖房であった。冬期の最高気温はずうつとマイナスであるが、古い家でも全室に薄着で快適にいられる。今年の夏、再び訪れた時、バスはトロリー化に促進され、軌道電車の拡張工事が着工されていた。そう、郵便屋さんは、三輪自転車かキャリーを引いて配達する。排気ガスによる汚染を避けるため電気エネルギー化を促進しているのだと思う。大気汚染に原因するオゾン層破壊の健康障害は深刻な問題であったようだ。夏によく注意報が出されていたから。

おわりに

愛知県での万博開催拒否に対する自然保護運動が耳に新しい。普段入ることもない山の自然保護を主張する熱心な運動は大切であるが、我れ関せずと感じる人も多いはずだ。ヨーロッパの自然は全てに日常生活密着していると感じたし、小さい頃から自然を愛する気持ちがあぐまれているのである。自然を破壊したりする気にはないのだと思った。

今、ヨーロッパはEC統合後の種々な大きな問題を抱える。それぞれの国には伝統的なやり方と事情があると思う。オーストリアは昨年ECに加盟したが、このすばらしさがいつまでも続くことを望みたい。

(あべ あきら 衛生技術学科 教授)

『嵐が丘』を訪ねて

小林 瑞穂

『嵐が丘』を私が知ったのは、サー・ローレンス・オリヴィエ主演のアメリカ映画でした。この映画が日本で上映されたのは、多分昭和二十年代の中頃に記憶しています。当時は第二次世界対戦後で、日本はアメリカの占領下であり、物も食べ物もなかった時代です。加えて戦前の軍国主義から突然民主主義になり、新憲法も公布され、自由主義だの民主主義だの、口では皆さんがよく唱えられました。国民全体の中には、実感として定着していない時代でもあります。今は外国の事を知ろうと思えば、幾らでも本も映像もあります。更に良く知ろうと思えば、直接そこに行つて自分の目で確かめることもできる良い時代です。当時は全くこのようなことは不可能で、私たちが外国を知る知識の窓口はリーダースタイルジェストの英語版、その後に日本語版もできましたが、これと外国映画と言つてもアメリカ映画ばかりでしたが、それしかありませんでした。ですから、私たちは良く映画を見に行きました。当時極めて文学的な映画作品として、この『嵐が丘』、ジェーン・エアなど、その後「風と共に去りぬ」とか「欲望という名の電車」などありました。が多分最も多くの人たちに共感を得たのは、この『嵐が丘』では無かったかと思えます。

ここで簡単に『嵐が丘』の概要を、池沢夏樹氏の観賞の手引きから、抜粋して申し上げます。「恋と言うものは、夢中になって、前後の見境もなくひた走る物と思うかも知れませんが、本当はそうで